2017年『源氏物語』（真木柱）現代語訳

二月にもなりぬ。大殿は、さてもつれなきわざ
二月にもなった。　光源氏は、それにしても（髭黒が玉髪を、光源氏に無断で自分の邸

なりや、いとかう際々（きはぎは）しうとしも思はでたゆめられ
に引き取ったこと）は冷淡な行動であるなぁ。本当にこのように思い切って（玉髪を奪う）とは思わないで

たる妬（ねた）さを、人わろく、すべて御心にかからぬをり
油断させられた悔しさを、体裁が悪いほどに、　気にかからない時は全く無く、

なく、恋しう思ひ出でられたまふ。宿世（すくせ）などいふ
（玉髪を）自然と恋しく思い出しなさる。　「前世からの因縁などという

ものアおろかならぬことなれど、わがあまりなる心に
ものは　いい加減でないものではあるけれども、　私の（玉髪に対する）過剰な恋心のせい

て、かく人やりならぬものは思ふぞかしと起き臥（ふ）し
で、　このように誰のせいでもない　物思いをするよ」　と、寝ても覚めても

面影にぞ見えたまふ。大将の、をかしやかに
（玉髪の）面影が見えなさる。　（玉髪が）髭黒のような、風流で

わららかなる気（け）もなき人に添ひゐたらむに、
陽気な様子もない人に　連れ添い続けるような状況なので、（玉髪への）

はかなき戯（たはぶ）れ言（ごと）もつつましうあいなく思（おぼ）されて、
ちょっとした冗談（の手紙を送るの）も遠慮され、　つまらなくお思いになって、

念じたまふを、雨いたう降りていとのどやかなる
我慢していらっしゃるけれども、雨が激しく降って　大変のどかなころ、

ころ、かやうのつれづれも紛らはし所に渡りたまひ
このような所在無さも紛れる（光源氏が立ち寄っていた玉髪の居所であった）場所にいらっし

て、語らひたまひしさまなどの、いみじう恋しけれ
ゃって、語り合いなさっていた様子などが、　大変恋しいので、

ば、御文奉りたまふ。右近がもとに忍びて遣はす
（玉髪に）お手紙を差し上げなさる。　右近の元にこっそりと（手紙を）お送りになる

東大合格 オンライン 敬天塾

も、かつは思はむことを思すに、何ごともえつづけたまはで、ただ思はせたることどもぞありける。

けれども、一方では（右近が不審に）思うのではとお思いになるので、何を書こうとしても続けることが出来なさらないので、ただ思わせぶりの内容が書いてあった。

「かきたれてのどけきころの春雨に
ふるさと人をいかにしのぶや

「雲が低く垂れて辺りが暗くなり穏やかな頃の春雨を眺めて、
実家の人（である私）をどのように偲んでいますか

つれづれに添へても、恨めしう思ひ出でらるること多うはべるを、ィいかでかは聞こゆべからむ」などあり。

所在なさに加えても、残念に思い出されてしまうことが多くございますが、どうして（あなたにそれをお話し）申し上げることができましょうか。いえ、できませんが。」などと書いてある。

隙（ひま）に忍びて見せたてまつれば、うち泣きて、わが心にもほど経るままに思ひ出でられたまふ御さまを、まほに、「恋しや、いかで見たてまつらむ」などはえのたまはぬ親にて、ゥげに、いかでかは対面もあらむとあはれなり。時々むつかしかりし御気色（けしき）を、心づきなう思ひきこえしなどは、この人にも知らせたまはぬことなれば、心ひとつに

（髭黒が）不在の折にこっそりと（右近が玉鬘に）見せ申し上げると、（玉鬘は）泣いて、自分の心にも時間が経つにつれて自然と思い出されなさった（光源氏の）お姿であるが、本当に、「恋しいなぁ、どうにかしてお目にかかろう」などとは仰ることができない（義理の）親なので、「なるほど、どうして対面すること もあるだろうか、いや無い。」としみじみと寂しい。時々、煩わしかった（光源氏の恋心を寄せる）ご様子を、不愉快だと思い申し上げたことなどは、この人（＝右近）にも知らせなさらなかったことなので、（玉鬘は自分の）心だけで内緒に

思しつづくれど、右近はほの気色見けり。エいかなりけることならむとは、今に心得がたく思ひける。

悩み続けるけれども、右近はなんとなく様子を察していた。「（玉鬘と光源氏は）どのような（男女の仲）だったのだろう」とは、今でも理解しがたく不審に思っていた。

御返り、「聞こゆるも恥づかしけれど、おぼつかなくやは」とて書きたまふ。

（玉鬘から光源氏への）お返事は「差し上げるのも気がひけるけれども、（お返事をしなかったら光源氏は）気がかりになるかしら」と思って書きなさる。

「ながめする軒（のき）のしづくに袖ぬれて
うたかたォ人をしのばざらめや

「長雨が降る軒の雫で袖が濡れて、（また、あなたを思っても涙で袖が濡れて、）少しの間もあなたのことを偲ばないことがありましょうか。いや、ありません。

ほどふるころは、げにことなるつれづれもまさりはべりけり。あなかしこ」とカぬやぬやしく書きなしたまへり。

雨が降って時間が経った今頃は、本当に格別な所在なさも強まりました。かしこ」と（見た人に恋文だと思われないように）敢えて他人行儀に書きなさった。

ひきひろげて、玉水のこぼるるやうに思さるるを、人も見ばうたてあるべしとつれなくもてなしたまへど、胸に満つ心地して、かの昔の、尚侍（かむ）の君を朱雀院（すざくゐん）の后（きさき）の切（せち）にとり籠（こ）めたまひしをりなど思し出づれど、さし当たりたることなればにや、これは

（光源氏は手紙を）広げて、涙がこぼれ落ちそうに思われるけれども、「人が見たら妙に思うだろう」と平然と振舞っていらっしゃる胸がいっぱいな気がして、あの昔の、当時の尚侍の君であったけれども、朧月夜を、朱雀院の母后である弘徽殿大后が強引に光源氏に逢えないようになさった時のことなどを思い出しなさるけれども、目の前のことだからだろうか、（玉鬘との）これは

世づかずぞあはれなりける。キ好いたる人は、
世間並みでは無いほどしみじみと悲しかった。「好色な人は、

心からやすかるまじきわざなりけり、今は何につけて
自分のせいで安心できそうにないことをするのだなぁ、今は何によって心も乱すだろうか

か心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりや、
（いや、玉鬘以外のことでは心を乱さない）、相応しくない恋の相手であるなぁ」

とさましわびたまひて、御琴搔（か）き鳴らして、
と、心を冷ましかねなさって、御琴を奏でて、

なつかしう弾きなしたまひし爪音（つまおと）思ひ出でられ
ことさら親しげに弾きなさった（玉鬘の）琴の音を思い出し

たまふ。
なさる。